

2020 年度自己点検・評価フォーム
(全学委員会用)

社会貢献センター運営委員会
(エクステンション課)

(社会貢献センター運営委員会承認)

【基準7】 学生支援

点検・評価項目

- (1) 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。
- (2) 学生支援の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【評価の視点】

- ◎ 学生支援体制の適切な整備
- ◎ 学生の修学、生活、進路、**正課外活動（部活動等）を充実させるための支援の実施、その他、学生の要望に対応した学生支援の適切な実施**
- ◎ 適切な根拠（資料、情報）に基づく点検・評価、点検・評価結果に基づく改善・向上

【記載の際に考慮すべき点】

- ① 修学支援、生活支援、進路支援その他支援を行うための体制は、方針に沿ってどのように整備されているか。
- ② 修学支援、生活支援、進路支援その他支援の取り組みは、学生支援に関する大学としての方針に沿って実施されているか。
- ③ 修学支援について、以下の対応、取り組みはどのように行われているか。
 - ・学生の能力に応じた補習教育、補充教育
 - ・学生の自主的な学習を促進するための支援
 - ・障がいのある学生に対する修学支援
 - ・留学生に対する修学支援
 - ・学習の継続に困難を抱える学生（成績不振、留年者、退学希望者等）への対応
 - ・学生に対する経済的支援（授業料減免、学内外の奨学金を通じた支援等）
- ④ 生活支援について、以下の対応、取り組みはどのように行われているか。
 - ・学生の心身の健康、保健衛生及び安全への配慮等に関わる指導、学生の相談に応じる体制の整備
 - ・ハラスメント（アカデミック、セクシュアル、モラル等）防止など学生の人権保障に向けた対応
- ⑤ 進路支援について、以下の対応、取り組みはどのように行われているか。
 - ・学生のキャリア支援を行うための体制（キャリアセンターの設置等）の整備
 - ・学生の社会的及び職業的自立に向けた教育（キャリア教育）
 - ・進路選択に関わる支援やガイダンス、その他キャリア形成支援
- ⑥ その他支援について、部活動、ボランティア活動等の正課外における学生の活動への支援など、どのような支援が行われているか。
- ⑦ 学生支援に関する自己点検・評価は、どのように行われているか（基準、体制、方法、プロセス等）。
- ⑧ 自己点検・評価結果に基づき、学生支援の改善・向上に向けた取り組みは、どのように行われているか。

【点検・評価項目】 および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評価： **A：目標が達成されている** >

- (1) 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

本学の創立者井上円了の教育理念にある「他者のために自己を磨く」とは、自分を磨くのは、人々のためにはたらくことができるようになるためであり、また、「活動の中で奮闘する」とは、現実社会における活動の中にとこまでも前進してやまないことである。それらのことを自覚して学業に励むことが東洋大学の心であるとしている。これは、学業に励みながら、社会貢献の心を持ち、社会課題に自主的に取り組むことにも通じている。本学

の学生に教育と社会貢献の精神を享受させることは、本学の使命である。

本学では、現在、様々な規模のボランティアサークルが30程度ある。大学としてのボランティア活動をスタートしたのは、2004年に発生した新潟県中越地震の災害ボランティアで、2005年より教職員・学生を派遣している。2008年からは、学生の組織である学生ボランティアセンターが活動を企画立案し、15年経過した現在でも山古志地区の活性化を促進するため、ボランティア活動を継続している（資料7-1）。

また、2011年（東日本大震災）以降、現在に至るまで教員や学生は、被災地支援の活動を継続している。学生の主体的な活動としては、前述の学生ボランティアセンターを中心として行っている（資料7-2）。このように本学では、被災地支援活動の継続、および多様なボランティア活動を実施していたが、大学としてのボランティア活動に特化した窓口がなかった。外部からのボランティア募集などの問い合わせや募集情報を精査し、学生に発信していく仕組みや相談体制が整っていなかったこともあり、2017年4月1日より、既に設置されていた社会貢献センター内にボランティア支援室を開設した（資料7-3）。

また、前述の理由に加え、組織をこのタイミングで開設した主な理由は、東京2020オリンピック、パラリンピックの開催である。一生に1度あるかないかという自国開催のオリンピック、パラリンピックのボランティア活動を経験することで、学生が大きく成長できるのではないか。オリンピック、パラリンピックのボランティアという社会的な活動を通して、学生は、自分が社会に貢献できる人間であることに気がつき、成長できる絶好のチャンスとなる。そのために大学が活動支援をすることは、急務であると考え、ボランティア支援室の開設に至った。

ボランティア支援室が設置されたことにより、全学生へ新たな学びを伴う企画提供や、各自が既に行っている活動への支援体制が整ってきた。例えば、東日本大震災から9年を経過した現在、報道で見た被災地の状況しか知らない学生が多くいる。こういった学生に当時の状況を事前学習で学ばせ、現在の状況を現地の当事者からの話などを加え体験させ、考えさせるスタディーツアーを継続的に実施している。ボランティア支援室が提供している企画詳細については後述するが、これらの企画については、ほとんどが全学生に提供されている。学部生が納付している課外活動育成会費により実施している企画のうち、人数が制限される活動については、対象を学部生のみとしているが、それ以外の活動については、学部生、大学院生、通信教育課程の学生、留学生の別なく、すべての学生を対象とし、活動を展開している。

現在、ボランティア支援室の支援活動を区分すると、①学生へのボランティア情報の発信、②ボランティア・コーディネーターによる相談窓口、③ボランティア活動促進のための講座、イベントの実施、④授業時におけるボランティアガイダンス等の実施、⑤交流会の実施、⑥活動支援、⑦災害対応、⑧他機関・地域・他大学等との連携、⑨その他学内他部署との連携・協働と多岐にわたっている（資料7-3、7-4、7-5）。

ボランティア活動促進のための講座、イベントの実績は以下の区分でまとめた。

[東京2020大会ボランティア応募支援]

東京2020大会ボランティア、都市ボランティアの応募につなげるため多くの講習会を実施した。

下記の講座には、白山キャンパス以外の学生も多く参加し、オール東洋で東京2020大会を盛り上げる支援策とした（資料7-4、7-5）。

| 講座名 | 参加者数 |
|---|------|
| ①スポーツボランティア研修会 | 272名 |
| ②外国人おもてなし語学ボランティア育成講座 | 377名 |
| ③初歩から学ぶ障がい者スポーツ | 12名 |
| ④東京2020オリンピック・パラリンピック大会の競技場などを巡るベニューツアー | 6名 |
| 合 計 | 667名 |

[被災地支援活動等]

現地でのボランティア活動以外にも募金活動など多様な被災地支援活動がある。

下記のような活動を通して、支援活動を行った（資料 7-5、7-7）。

| イベント名 | 内容 |
|-----------------|---|
| ①募金活動(赤十字を通じ寄付) | 九州北地方の大雨災害の募金活動—総額99,106円 平成30年7月豪雨災害の募金活動—総額502,068円 |
| ②被災者への学生応援メッセージ | 6号館通路で実施。ボランティア支援室HPに応援メッセージを掲載し、被災地に発信。 |
| ③災害ボランティア活動講習会 | 学生が個人的に現地にボランティア活動に入ることも想定し、実施。 |
| ④活動助成事業 | 被災地支援として「ふるさとボランティア活動助成事業」を設立し、ふるさとでのボランティア活動に対し、一部経費補助を行う。 |

[1Day ボランティア実施]

ボランティア活動はしたいが、何から始めればよいのかわからないという初心者向けに、ボランティア活動の初めの一步をボランティア支援室でサポートした。無理なく参加ができるようにゴールデンウィークを中心に1Day ボランティア活動を実施した（資料 7-5）。

| イベント名 | 参加者数 |
|-------------------------------------|--------------|
| ①荒川クリーンアップ活動 | 23名参加予定→雨天中止 |
| ②こもれびの森・里山支援隊(森林保全) | 12名(学生) |
| ③SO(知的障害者アスリートとのパートナーシップ育成)スタディーツアー | 9名 |
| ④カンボジアフェスティバル2日間(国際理解) | 18名 |
| ⑤寺子屋子ども食堂(学習支援) | 継続中30名以上 |
| ⑥さきちゃんち「おたがいさま食堂inさきちゃんち」1Dayボランティア | 5名 |
| ⑦さきちゃんちで遊ぼう(緑の高尾山に行こう 雨天中止のため予定変更) | 3名 |
| ⑧飯能市 夏休みの小学生のための 宿題サポート・遊ぼう!話そう! | 17名 |

[課外活動育成会費によるボランティア活動他]

東北での活動については、多くの学生がはじめて被災地に入り、当時の状況そして現状の問題点などを学んだ。被災地の記憶を風化させないように、継続的にスタディーツアーを実施している。

また、多様な学びを伴う活動支援として、大学に宿泊しての災害疑似体験、車いすに乗り障害を持った人が、街中でどのように不自由を感じているかなどを実際に体験し、多くの学生の学びおよびボランティアマインドの涵養につなげた（資料 7-4、7-5）。

| [2018年実施] | |
|--|---------------|
| イベント名 | 参加者数 |
| ①里親子を地域とつなぐ活動(里親子支援)-千葉県里親会と大学の共同 デイキャンプ | 35名 |
| ②東洋大学の卒業生が現役生に伝える、被災地の現状とこれから(被災地スタディーツアー) | 14名 |
| ③大地震、そのときどうする?-発災後を生きぬけ! 学内宿泊サバイバル体験-(防災、減災) 第1部~4部 | 延べ48名 (学生) |
| ④バリアフリー情報アプリ「B-maps」を活用した、バリアフリーまちあるき(障害者支援) | 15名 |
| ⑤Be a Good Universal Volunteer~ユニバーサルマナー講演会~(障がい者理解) | 25名 |
| ⑥被災地の大学生と東洋大生が取り組む被災地支援のあり方(被災地スタディーツアー) | 20名 |
| ⑦福島県いわき市の漁業の現状を発信する(被災地スタディーツアー) | 28名 |
| [2019年実施] | |
| イベント名 | 参加者数 |
| ①里親子を地域とつなぐ活動(里親子支援)-千葉県里親会と大学の共同 デイキャンプ | 52名 |
| ②福島県の子どもに寄り添うプログラム(子ども支援) | 46名 |
| ③福島県いわき市の農業の現状を発信する(被災地スタディーツアー+ボランティア) | 13名 |
| ④東洋大生の知らないLGBTの世界(ユニバーサルマナー講習会) | 31名 |
| ⑤大地震、そのときどうする?-発災後を生きぬけ! 学内宿泊サバイバル体験-(防災、減災) | 14名 |
| ⑥被災地の大学生と東洋大生が取り組む被災地支援のあり方(被災地スタディーツアー) | 21名 |
| ⑦福島県いわき市の漁業の現状を発信する(被災地スタディーツアー)新型コロナ感染症拡大に伴い、中止。 | 申し込み31名→中止 |

[ボランティアカフェ実施]

ボランティアカフェは、サークルや個人でボランティア活動をしている学生、まだ活動はしていないが興味がある学生の交流の場としての役割を担っている。学内外の様々な団体、個人の活動を知ること、海外でのボランティア活動を含め、多様なボランティア活動の動機付けを図る（資料 7-4、7-5）。

| [2018年実施] | |
|---------------------------------|--|
| 主なボラカフェ タイトル | |
| ①復興7年目の東北と向き合う人たち『復興』先へ | |
| ②ワークキャンプで過ごす夏! | |
| ③文京区の活動『フミコム?』 | |
| ④ボランティア活動+ライブ?「アメリカ発のボランティア活動」 | |
| ⑤震災から7年9ヶ月、岩手のヒト・モノ・コト、そして子どもたち | |
| ⑥僕の『Tokyo2021』へのかかわり方 | |

| |
|--|
| [2019年実施] |
| ボラカフェ タイトル |
| ①子どもに向き合う一生ものの経験を |
| ②ワークキャンプで過ごす夏！ |
| ③主権者教育ってなあに？ |
| ④人生を180度変える出会い！ |
| ⑤あなたを「おかえり」で待っています～大槌プロジェクト～ |
| ⑥今からでも間に合う！今年の夏、国際ボランティアのススメ！ |
| ⑦「自然のミライ、考えませんか？ボランティアで社会課題を解決！」 |
| ⑧台風19号 災害ボランティアに行く前に！－防災のプロが語る、安全に活動するためのポイント－ |
| ⑨一歩踏み出した、その先に広がるセカイワークキャンプに行ってきました！－ |
| ⑩東洋大学とSDGs～身近なことを「自分ごと」に |

[企業 CSR、NPO 他の取り組みを見に行こう スタディーツアー]

ボランティアや社会貢献に関心があるが、何をしたらよいかのわからない、どのような活動があるかわからない学生向けに、実際の社会における社会貢献の現場を知ってもらう。企業 CSR については、身近な企業が、営利目的以外にどのような社会貢献活動を行っているということを知り、就職先を考える際に新たな視点を持つことが出来る（資料 7-3、7-4）。

| | |
|--|------|
| [2017年度実施] | |
| 訪問先 | 参加者数 |
| ①日本IBM株式会社 | 12名 |
| ②LINE株式会社 | 23名 |
| ③NPO法人山友会 | 12名 |
| ④ヤフー株式会社 | 10名 |
| ⑤ソニー生命保険株式会社 | 9名 |
| ⑥社会福祉法人武蔵野会リアン文京 | 6名 |
| [2018年度実施] | |
| イベント名 | 参加者数 |
| ①オリパラ前に内なる国際化を実感しよう！多文化のまち・大久保を歩く(井上円了リーダー哲学塾合同開催) | 18名 |
| ②中高生の秘密基地b-lab見学ツアー(井上円了リーダー哲学塾合同開催) | 18名 |
| ③「そなエリア東京」で学ぶ、防災・減災ボランティアアクション | 4名 |

[東洋大学・ボランティア WEEK～人権とボランティアについて考えよう～]

本学においては、子ども、障がい者、高齢者、被災地、国際理解、環境などをテーマにした学生によるボランティア活動が既に行われているが、これらは一部の学生に限られている。ボランティア WEEK では、各企画を授業で実施することにより、社会貢献に無関心な学生に対しても、社会問題を考えさせ、問題意識を持たせることを目的とし、講演会等を実施した（資料 7-4、7-5）。

| [2018年実施] | |
|---------------------------------|--------|
| イベント名 | 参加者数 |
| ①映画「くちづけ」(障がい者支援)上映+座談会 | 約200名 |
| ②障がいのある子どもの子育てを通して想うこと | カウントせず |
| ③講演会 ロヒンギャ問題における人権課題—難民キャンプ事例から | 約350名 |
| ④講演会 着床前診断・出生前診断からゲノム医療の技術の最前線 | 約390名 |
| ⑤映画 性別がない—インターセックス漫画家のクエアな日々 | 約210名 |
| ⑤講演会 病院にある学校・学級の子どもたちの今 | 約200名 |
| ⑥映画 私はマララ | 約130名 |

| [2019年度実施] | |
|--|------|
| イベント名 | 参加者数 |
| ①映画 ボバディ・インク～あなたの寄付の不都合な真実～ | 17名 |
| ②講演会 学校の中の人権問題～ブラック校則を考える | 63名 |
| ③講演会 ユニファイドスポーツを知っていますか？ | 553名 |
| ④講演会 企業と人権 | 41名 |
| ⑤映画 さとにきたらええやん(子どもの居場所) | 80名 |
| ⑤講演会 貧困と社会的排除/貧困論「だれでもが安心して地域で生活を送ることができる社会に向けて」 | 96名 |
| ⑥講演会 医療を受ける権利 | 270名 |
| ⑦ワークショップ SDGs 世界がもし100人の村だったら | 25名 |
| (課外活動育成会企画については、前述記載済み) | |

[活動助成金と表彰の実施]

2019年度から社会貢献センターでは、学生のボランティア活動等、社会貢献活動の充実に寄与するために、学生団体へのプロジェクトに対して助成を行うとともに表彰制度を実施している。

これにより、学生の活動に伴う経済的負担軽減と新たな取り組みの展開を図ることができる(資料7-6)。

| [助成金採択] | |
|---------------------|---|
| 団体名 | 活動内容 |
| ① GoodNeeds | 子ども支援: 集団行動、キャンプ等を通しての子供の自己形成や承認欲求を満たすことなどを目的としている。 |
| ②読み聞かせ朗読会 | こども達に絵本、紙芝居の読み聞かせ、パネルシアター、ペープサートの披露を行うことで、こども達の健やか成長と地域の読書活動の促進に貢献 |
| ③福島県いわき市の活性化を考える会 | 福島県いわき市における伝統地域行事、祭礼の運営補助 |
| ④ボランティアサークル | ISR-ConnAntion: フィリピンセブ市、レイテ島貧困地域におけるインタビュー調査→現地にてココナッツオイルを生産し日本で石鹸を生産して販売。 |
| ⑤国際地域 能登太鼓チーム | 能登の地域文化である太鼓を地域資源とし活用した地域活性化。現地太鼓チームを誘致し大学祭にて披露、体験する。 |
| ⑥国際ボランティアサークルSlamat | フィリピンにおける子ども支援 |
| [表彰] | |
| ①個人活動 | アフリカの3か国で主に子どもたちへの教育活動 |
| ②個人活動 | ラオス語版九九の歌普及活動 |

[コロナ禍におけるオンライン事業の実施]

2020年度社会貢献センターでは、2019年度末より新型コロナウイルス感染拡大に伴い、例年行っている各種事業および窓口相談が一切できなくなった。その中で、オンラインでできることは何かを考え、以下の事業を実施した。

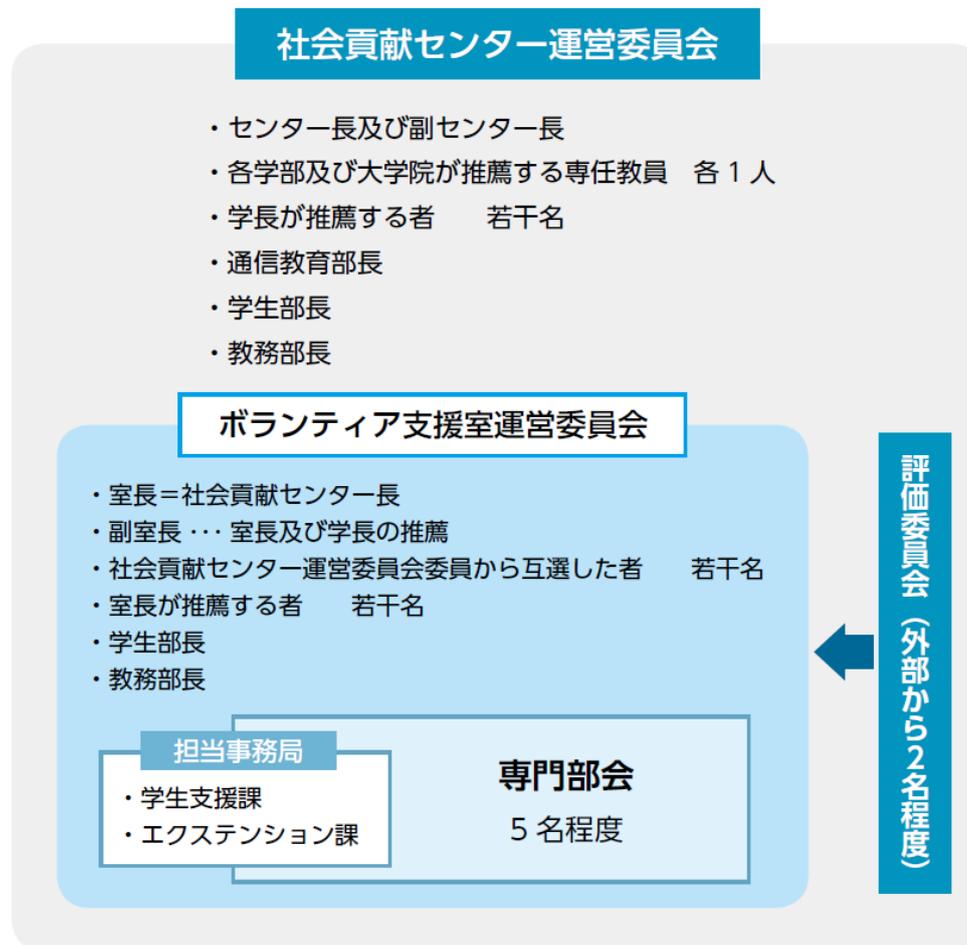
また、2020年5月13日～6月30日までの間、ボランティアに関する意識調査を行った。コロナ禍で学生が社会的な活動ができない状況下、収束後に活動するために力を蓄える時期であるということを伝え、学生たちの思いを確認し、収束後の活動支援の参考とした。

また、新型コロナの感染拡大に伴い、活動が中止になった「福島県の子どもに寄り添うプログラム」（被災地の母子家庭の子どもたちと交流することで、復興・創生の現状と向き合い、本学学生として「できることは何か」を深める）をオンラインで現地とつなぎ、オンライン上での現地活動の中継と支援を実施する予定である（資料7-7）。

| イベント名（オンライン） | 参加 |
|--|-----------------------|
| ①ワークショップ「新型コロナウイルス感染症とわたしたち」 | 4名（イベントスタッフ+コーディネーター） |
| ②ボランティアサークル向け春のオンラインサロン | 15名（コーディネーター含む） |
| ③防災・災害ボランティアミーティング（セミナー） | 6大学合同実施（本学8名） |
| ④東洋大生がワークショップで学ぶ初めてのSDGs | 23名（教職員含む） |
| ⑤「しゃべり場」（オンライン窓口）オープン | 随時 |
| ⑥白山ボランティアサークル オンライン説明会 計3回 | 随時 |
| ⑦ボラカフェ（あつまれ！国際ボランティアやってみたい人）計2回 | 随時 |
| ⑧ボランティア支援室ご案内 | 随時 |
| ⑨各種授業におけるボランティア関連ガイダンス（「ボランティア活動入門」、 「大学生として学ぶ」、 「社会福祉学基礎演習」全7回） | 授業受講者 |

(2) 学生支援の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

<委員会組織図>



ボランティア支援室では、開設以来、毎年、外部評価を受審している（資料 7-3、7-4、7-5）。
体制としては、社会貢献センター内に設けられたボランティア支援室運営委員会での受審となる。

外部評価においては、ボランティア支援室要項（業務）第 4 条（1）ボランティア支援室の方針及び計画の策定に関する事項、（2）ボランティア活動の開拓及び実施に関する事項、（3）ボランティア活動に関する情報の収集、管理及び提供に関する事項、（4）ボランティアに係る相談、助言及び支援策に関する事項、（5）学外ボランティア関係機関等からの紹介及び連絡調整に関する事項、（6）その他ボランティア支援室の目的達成に必要な業務について評価をお願いしている。

外部評価者の選定にあたっては、他大学でボランティアセンターの関連業務にあたっており、本学のボランティア活動全体を他大学の活動と比較し、新たな取り組み事例などを具体的にアドバイスいただける評価者を選定している。下記の評価者は、コーディネーターの推薦によるものである。受審実績は、以下の通りである。

なお、2019 年度は、2020 年 3 月 3 日（火）に実施予定であったが、新型コロナ感染症拡大防止に伴い、書面受審に変更となった。

第 1 回外部評価：2018 年 2 月 26 日（月）16：00～外部評価者 首都大東京准教授 室田信一氏

評価結果は、以下のとおりである（上記、ボランティア支援室要項 第 4 条各号に対応）。

(1) 教員が参画することでボランティアセンターが学内で公的な位置づけを得ている。その結果、コーディネーターやスタッフは学内の協力を得やすい環境が整っていると思われる。運営委員会と専門部会を分けて、専門部会が頻繁に会議を重ねて運営方針を検討するという組織構造も実利的で良いと思う。社会貢献

センターとの関係性がよくわからなかった。形式的なもので、実際にはボランティア支援室は独立しているのか、社会貢献センターの運営委員会による介入はあるものなのか。社会貢献センター内部に位置付けることのメリット・デメリットが示されると良いと思った。

- (2) 東洋大学が内外に持っている資源（人的資源、ネットワーク）を活用して幅広く魅力的な取り組みを展開している。初年度とは思えないほど充実した内容・頻度で開催しており、コーディネーターの企画力・実行力の高さを感じる。各種イベントなどに参加した学生がその後どのように関わり続けているのか確認できていると良いと思う。初年度はこれらの取り組みに企画時点から関わっている学生が多くないと思われるが、2年目以降、学生が企画に関わり、さらに参加した学生が運営側に関わるような仕組みがあると活動の広がりが出てくると思う。
- (3) 既存の情報を整理してアクセスしやすい形で学生に提供するようになったという点で、ボランティア支援室ができた意義は大きいと思う。学生に届く情報発信はどここのボランティアセンターでも苦勞していると思う。最も効果的な発信方法はボランティア支援室の公式な情報発信よりも、学生のプライベートなSNSなどで拡散されることなので、そのように情報を拡散する学生をいかに取り込むかが今後の課題になるだろう。一方で、SNSなどで誰とも繋がっていない学生にアプローチするのは教員や学生からの個別の声かけが効果的なので、そうした方法を充実させることも重要になる。
- (4) コーディネーターの業務をサポートする学生コーディネーターが充実すると相談・助言の裾野が広がると思われる。
- (5) 文京区との連携は東洋大学の強みなので、継続して連携できると良いと思う。また、他のキャンパスでのボランティア活動を推進するためにも、文京区以外の社協や市民活動支援センターと連携できると良い。
- (6) 文京区内には他にも大学があるので、区内の他の大学との連携を追求してはどうか。オリパラに向けても東京都内の大学ボラセンの連携が求められると思うので、東京都ボランティア・市民活動センターなどと連携しながら都内の連携強化を図れると良い。

第2回外部評価：2019年3月5日（火）10：30～ 外部評価者 首都大東京准教授 室田信一氏

- (1) 前年度の評価でも述べたが、多部署の教員が参画する専門部会と運営委員会を開催することで、学内における公的な位置付けを得ることができており、センターを運営する上で多部署の協力を得られやすい環境整備に貢献していると思われる。
- (2) 評価者の所属大学では取り組むことはできていないが、計画の策定の過程、もしくは評価の過程に実際にボランティア活動に取り組む学生の代表を含めることを検討してはどうか。委員や評価メンバーとして直接参画することが難しい場合は、学生へのヒアリングやアンケートなどによって学生の声を把握するか、学生の運営委員のような体制を作ることで学生の声をセンターの運営に反映することもできるのではないだろうか。
- (3) 初年度も充実したプログラムを提供していたが、今年度もさらに充実したプログラムを提供していることが確認できる。ボランティアセンターが提供するプログラムには、無関心層に対する多様な入り口を提供するもの、関心のある層のニーズを満たすもの、経験を積んだ層のリーダーシップを高めるもの、といった段階的な整理が可能であるが、今年度のプログラムを拝見すると、無関心層および関心層へのプログラムがさらに充実したように思う。今後は経験を積んだ層へのプログラムの一層の充実を期待する。
- (4) 東洋大学の既存インフラや授業内での呼びかけなど、周知の方法が定着してきたように思われる。どのような周知方法でどれくらいの参加者を見込めるか、データとして整理することで、今後、周知を行う際の参考資料になる。SNSなどは有効ではあるものの、WOMや立て看板などの非デジタルなアプローチが効果を発揮することは多いので、ボランティアセンターを使ったイベントなど、センターの存在を周知することで、センターに立ち寄ると何かが起こっている、という印象を学生の中に持ってもらうような戦略

もあると良い。

- (5) また、マスメディアや広報誌（区報など）を通した PR も効果的だと思われるので、年に 1 回はマスメディアに取り上げられるような計画を立てるなどの方法も検討して良いかもしれない。
- (6) 課題の改善方法でご提案いただいている講座などを入り口にボランティア・コーディネーターの存在を高め、相談に来ることのハードルを下げることは有効だと思われる。同じことの繰り返しになってしまうが、学生目線で、どのようなアプローチが有効かを検証できると良いだろう。
- (7) フミコムで東洋大学主催のイベントを開催するなどの協働が今後増えると良いのではないか。
- (8) また、東京ボランティア市民活動センターのフォーラムへの学生の参加や、場合によっては学生のリーダーが実行委員会に参加するなどの関わりができることは理想的である。
- (9) ボランティア WEEK など、学内の関係部署との連携が強化されたことは素晴らしい。ミーティングスペースとしての活用は良い提案である。他にも例えば、ゼミ単位で地域のフィールドワークをしているようなゼミの成果報告をボランティア支援室で開催してもらうなど、ボランティア支援室が多様な関係者に使われるようになると良い。

第 3 回外部評価：2020 年 3 月 外部評価者 東海大学講師 市川 享子氏

I 判定 (S~C) : A

| | |
|---|--|
| S | ボランティア支援室の目的、全学的な方針に基づいた活動が行われ、目的・目標の達成が極めて高いことが、根拠資料で証明されている。 |
| A | おおむね、ボランティア支援室の目的、全学的な方針に基づいた活動が行われ、目的・目標がほぼ達成されている。 |
| B | ボランティア支援室の目的、全学的な方針に基づいた活動や目的・目標の達成がやや不十分であり、改善すべき点がある。 |
| C | ボランティア支援室の目的、全学的な方針に基づいた活動や目的・目標の達成が不十分であり、改善すべき点が多く、抜本的な改善が求められる。 |

II 総評

ボランティア支援室は設立から 3 年間という短期間のなかで、貴大学において基盤を築き、学生の社会参画の機会を広く創り出している。活動のテーマも幅広く、またボランティア潜在層、初歩的なもの、宿泊型、学生の自主性が発揮される助成金を用いての支援など、学生の状況に応じたきめ細やかな対応が定着している。

一方で、ボランティア支援室の活動の受益者が白山キャンパスに集中しがちであることから、全学機関として、他キャンパスにおける支援室活動のあり方については工夫が必要と思われる。

また、ボランティア活動への参画が学生のどのような力の育成につながるのか示すことで、学生にボランティア活動の重要性を伝えることができ、さらに学内の各機関や教職員連携・協働が広がる可能性がある。

III 概評及び提言

1 理念・目的

<概評>

① ボランティア支援室の目的を適切に設定しているか。

ボランティア支援室の目的は「東洋大学ボランティア支援室用要項」に定められているが、大学や社会貢献センターとの関連のなかでは述べられていない。今後のボランティア支援室の貴学での更なる発展を考える際、貴学の社会貢献や教育理念との関連づけながら、目的をさらに明確化することが重要であると思われる。貴学の中期計画「TOYO グランドデザイン」で明示されている「活動のなかで奮闘する」と、ボランティア支援室の目

的、方針、内容などを有機的に関連づけていくことなど、貴学独自のボランティア支援室の理念と機能を創り上げていくことの検討を期待したい。

② 社会貢献センターの目的を明示し、社会や学内と共有しているか

ボランティア活用が有する多様性の理解や包摂に向けて、幅広いテーマのもと、学生の状況やニーズに応じた活動が進められている。創意工夫に基づいた活動の現状は大変高く評価されるべきである。今後は支援室によるプログラム提供に留まらず、過年度での評価でも指摘されているように、企画や活動のなかで学生の視点やリーダーシップが発揮されるようなプロセスを埋め込んだり、学生スタッフの育成を通じて、より学生のリーダーシップが発揮されることも期待したい。

③ ボランティア支援室の目的等を実現していくため、大学として将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策を設定しているか。

東洋大学の中長期計画のなかで、ボランティア支援室の目的、各段階に応じた計画を位置付けていくことが重要である。特に「TOYO グランドデザイン」の社会貢献分野で示される「活動のなかで奮闘する」の実現とはどのようなことか、支援室の運営委員会や専門部会での検討を通して、支援室活動と有機的な関連づけを明示していくことも必要である。その際参加型評価やプログラム評価の手法を用いて、ボランティア支援室の多様なステイクホルダーとともに、ボランティア支援室の中長期像を創り上げていくことも効果的で可能性がある。

<提言>

長所

ボランティア支援室設立から3年という短い期間で、基盤を形成し確実な成果を出している。ボランティア室が現代的でタイムリーなテーマから活動を作り上げ、学生の参加の場を構築し、安定的な活動を推進していること。ボランティア支援室や学生の動向についてのデータの収集と分析がされており、支援室によるデータの蓄積が進められていること。活動の記録や定型的なフォーマットのもとに、毎回作成されており、記録の仕組みが構築されていること。

改善課題

- ・ボランティア支援室に学生の参画を広げること。ボランティア支援室の運営部門に学生委員を位置づけたり、学生スタッフの育成を通して、地域社会との協働を通して課題を解決に寄与し、リーダーシップを発揮する学生の育成が期待される。
- ・ボランティア支援室の受益者が白山キャンパスに偏りがちになっている懸念がある。学内の複数の拠点やキーパーソン（各キャンパスや各部門で中心となる教職員や学生、地域関係者）を発掘し、目指す方向性を相互に確認・構築しながら、リソースも共有しながら展開することも効果的と思われる。
- ・ボランティア支援の目的・活動と大学教育の接続像が見えづらいので、その関連づけの議論によって貴学の教育力の向上にも寄与することも考えられる。今後はサービス・ラーニングのような社会貢献と教育と統合した教育プログラム／カリキュラムの開発等、大学の複合的な使命との関連づけについても検討を期待したい。

外部評価コメントをまとめると、開設初年度よりかなりボランティアに関する蓄積があり、2年目にはさらに充実したプログラムを提供している。開設2年目となった2018年度は、ボランティア支援室が提供するプログラムは、無関心層および関心層へのプログラムが、さらに充実した。また3年という短い期間で、基盤を形成し、確実な成果を出している。

しかし、コメントには、ボランティア活動の主役は学生なので、学生の声を聴く必要がある。学生ボランティ

アスタッフを養成し、企画を実施するとよいのではないかと指摘があった。また、ボランティア支援室自体の課題としては、キャンパス間の支援体制が大きく異なり、支援に温度差が出てきていると感じていた。

これらの指摘事項については、2019年度は、ボランティア支援室「イベントスタッフ」を養成し、ボランティアウィークに企画実施した他、ボランティアカフェを月1ペースで開催し、学生からの様々な要望を直接聞く機会を得た。2020年度には、後述するようにボランティア支援室「イベントスタッフ」から「サポートスタッフ」と名称を変更し、単にイベント運営に補助的に関わるということではなく、「共生社会・市民社会創造の手段としてのボランティア活動への理解」を基本方針としたスタッフ養成方針を掲げている。

また、キャンパス間の支援体制の温度差については、現在できる範囲での策を講じ、他キャンパスにおいて学生ボランティアサークル合同説明会や、ボランティアウィークにおける企画を実施。また、ボランティア活動の動機付け、被災地活動に入る前の心得として、希望者にはムービーによる配信も試みている。2020年度には、コロナ禍においてオンラインを通じたボランティアサークル合同説明会、SDGs ワークショップ等を実施し、全キャンパス同じ状況下での活動を実施することができている。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

ボランティア支援室で実施する様々な活動は、学生、ボランティア・コーディネーターおよびボランティア支援室専門部会のメンバーが中心となり策定している。各企画の学生参加については、経費負担を軽減するために無料、または遠方地域での企画については、ほぼ食費のみの安価な価格で参加ができるよう、大学予算または課外活動育成会費を活用し実施した。特長的な活動は以下の通りである。

- ① 被災地スタディーツアー：大学側でバス、宿泊先を手配し、経費負担。学生の参加費用を少なくすることで、福島、宮城の被災地のスタディーツアーなどを実施することが可能となった。当時、また現在の被災地の状況を全く知らない学生達に、震災に対する問題意識を持たせることが出来た。
福島県いわき市のスタディーツアーでは、留学生を交えSNSで世界中に「いわきの漁業の現状を発信する」活動や現地の生産物を学内外でフェアトレード方式の販売も行った。また、宮城では現地の若者との交流を通して、これからの地域の在り方や震災体験を伝えることの意義などを学んだ。
- ② 活動助成：学生の社会貢献活動の継続と活性化を図るため、助成金および表彰制度の実施による活動経費支援を行っている。また、被災地支援活動として「被災地支援 ふるさとボランティア活動助成金事業」もスタートした。
- ③ 防災・減災：外部の災害支援・防災教育コーディネーターの協力により、大学内で首都直下型が発生した際、どのような状況になるか宿泊を伴うイベントで体験した。災害の疑似体験することで実際の災害時に備えるとともに、減災についての学びも行った。
- ④ 2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、5月1日現在、各種対面を伴う事業が実施できない状況継続しているが、オンラインイベントを実施することで、他キャンパスからの参加が容易になった。

【問題点・課題】

- ① 活動支援のキャンパス間格差：キャンパスが5つに分かれており、学部の専門性からもボランティア活動に積極的に取り組むことが難しいキャンパスもある。また、必要性を感じながらも場所の確保が難しいことなどにより、他キャンパスでの支援ができない状況もある。
- ② 受講者確保：様々なボランティア関連活動を企画し、広報活動を相当しても、3万人超の学生総数のほんの一部の学生しか活動に参加しない。
- ③ 2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、一切の活動が停止してしまった。このような状況は予想もしていなかった。オンラインを通じての活動のみと制限された中で、支援策を検討することは、非常に困難な状況である。

【将来に向けた発展方策】

ボランティア支援室では、外部評価の指摘事項でもあるボランティア活動の計画について、学生の意見を取り入れるためにもイベントスタッフの養成に力を入れるとともに、2020年東京オリンピック・パラリンピック後の学生のボランティアマインドの涵養を目指し①地域貢献、②防災・減災、③共生社会をボランティア支援室の活動の柱として支援を行う。

また、地域連携については、現在も多少は行っているが、まだまだ連携が弱い部分もあるので、外部評価の指摘も踏まえ検討をはじめ。加えて、今まで学内で分散していた学生のボランティア活動に対する支援は、2020年度よりボランティア支援室を中心に行う方向で検討を進めている。これにより各活動に適切な指導を行い、活動内容の一層の充実を図ることが可能となる。

また、継続性のあるボランティア活動の在り方の検討および中長期的計画の立案としては、近年、就職活動の面接などにおいて、大学在学中のボランティア活動体験を問われる、という認識が学生間で共有されていることから、「ボランティア活動を『経験すること』」を求めて、ボランティア支援室に相談が寄せられる傾向が見られる。

継続的な活動に発展しにくい要因として、第1に学生が自身の関心や問題意識を明確にするまでに時間がかかることが挙げられる。問題意識を明確にするための手段として、さまざまな種類のボランティア活動に関わるということは合理的と考えられる。他方、活動後のふりかえりの機会において、活動を内省化する中で少しずつ「軸」をもって活動することを働きかけることで、活動の継続性を促していく取り組みを充実させることとする。

第2に、ボランティア活動が社会と関わるための「手段」であるという認識が薄いことが挙げられる。事実、ボランティア入門講座等の受講生の反応から、そうした傾向が伺える。地域活性・災害・福祉といった社会課題は、ボランティア活動の他にも学業やアルバイト、インターンシップ、更には卒業後に本業とするなど、関わるための手段がある。ボランティア活動が1つの「手段」であるという認識をもつことによって、他の手段と組み合わせながら継続的に取り組みやすくなるのではと考える。現在、対面での活動が原則できない状況の中、「ボランティア活動への認識」を深めることや、知識・スキルを得ることへのニーズが、「ボランティア活動に関する意識調査」の結果からも見えてきた。具体的なプログラム立案の前段階として、学生のボランティア活動に関する認識をセミナーやトークイベントなどの開催を通じて確認し、ボランティア活動を継続し社会と関わる上でどのような環境整備への要望があるかのニーズ把握を、対面活動再開までの時期において注力することとする。その後、当面は「Toyo 1day ボランティアプログラム」を改良する形で、参加者に次へのステップを提示できるようなプログラム構築を検討することとする。

イベントスタッフの養成については、昨年度は「イベントサポートスタッフ」と名称を冠し、ボランティアカフェなどの活動レポートを執筆しホームページに掲載することや、イベント運営の実際を学ぶ取り組みとして、「東洋大学ボランティアWEEK2019」に向けた企画・運営を担った。今年度より「サポートスタッフ」と名称

を変更し、単にイベント運営に補助的に関わるということではなく、「共生社会・市民社会創造の手段としてのボランティア活動への理解」を基本方針としたスタッフ養成方針を掲げた。サポートスタッフの中で、大学内のボランティアサークルに加入している学生は1名のみだが、そのメンバーが中心となり、既存のボランティアサークル間の橋渡しを行いながら、サポートスタッフとサークルとの連携と協働を意識した活動を志向しつつある。サポートスタッフの育成のプロセスとしては、サポートスタッフ自身が企画の計画段階から関わり、合意を得ながら自己決定過程を重視するようにしている。コロナ禍で対面活動が行えない現段階に、ボランティア活動についての本質を学ぶ機会を提供し、その上でサポートスタッフ自身が本学の学生ボランティアの活性化に関するビジョンを描けるような働きかけを進めていく。

////////////////////////////////////
【根拠資料】

- ・資料 7-1 学生ボランティアセンター活動報告書（山古志）
 - ・資料 7-2 学生ボランティアセンター活動報告書（気仙沼/大船渡）
 - ・資料 7-3 平成 30（2017）年度版 東洋大学ボランティア支援室年報
 - ・資料 7-4 平成 31（2018）年度版 東洋大学ボランティア支援室年報
 - ・資料 7-5 2019 年度版 東洋大学ボランティア支援室年報
 - ・資料 7-6 2019 年度版 東洋大学社会貢献センター年報
 - ・資料 7-7 2020 年度 春期東洋大学ボランティア支援室 活動等まとめ
- ////////////////////////////////////

【基準9】社会連携・社会貢献

点検・評価項目

- (1) 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。
また、教育研究成果を適切に社会に還元しているか。
- (2) 社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【評価の視点】

- ◎ 学外組織との適切な連携体制
- ◎ 社会連携・ 社会貢献に関する活動による教育研究活動の推進
- ◎ 地域交流、国際交流事業への参加
- ◎ 適切な根拠（資料、情報）に基づく点検・評価、点検・評価結果に基づく改善・向上

【記載の際に考慮すべき点】

- ① 社会連携・ 社会貢献に関する方針に沿って、学外機関、地域社会等との連携による取り組み、大学が生み出す知識、技術等を社会に還元する取り組み等は、どのように行われているか。
- ② 社会連携・ 社会貢献活動において、社会的要請（地域社会のニーズ等）は、どのように反映されているか。
- ③ 社会連携・ 社会貢献活動に関する自己点検・評価は、どのように行われているか（基準、体制、方法、プロセス等）。
- ④ 自己点検・評価結果に基づき、社会連携・社会貢献活動の改善・向上に向けた取り組みは、どのように行われているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評価： **A：目標が達成されている** >

- (1) 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。
また、教育研究成果を適切に社会に還元しているか。

本学の社会連携及び社会貢献活動の歴史は、創立者である井上円了による「哲学館」の創立に向けた志と全国巡講という社会教育への挑戦に遡る。本学の前身となる「哲学館」の創立趣意書には、「余資なく優暇なき者に教育を開放する」とあり、井上円了は、哲学館に通えない遠隔地の人々のために「館外員制度」を設け、今日の通信教育の形で全国にその門戸を広げ、さらに現在の公開講座にあたる「日曜講座」も実施した。

さらに井上円了は、多くの人々への教育の場を求めて、地方のすみずみに自ら出向いて講義をする「全国巡講」の旅に出るなど、市民教育の礎を築いた。仏教思想の中に数千年の歴史をもつ「東洋の哲学」があることを発見した井上円了は、それを体系化し、すべての日本人に伝えることに情熱を注ぎ続けた生涯を送り、約30年間、延べ全国3000以上の市町村で民衆への講演活動を行い「日本の社会教育・生涯学習」に大きな役割を果たした。

この遺志を継承するのが「東洋大学の講義を全国各地にお届けします一講師派遣事業」である。この事業は、全国どこへでも本学教員が無料で講義を届けるという取り組みであり、近年では、年間100件程度、21年間で2,200件を超える数多くの講演実績を誇っており、大学の社会貢献事業として高く評価されている。

社会貢献センターは前述のとおり、本学の前身である哲学館の創設直後より本学が担う、生涯教育に関する諸事業を積極的に推進するとともに、社会貢献活動に関する支援策の策定、情報収集、発信及び提供することを通じて、社会に開かれた大学として社会貢献の発展に寄与し、本学の発展に資することを目的として設立されてい

る。この目的を達成するために、社会貢献センターに生涯学習部門と社会貢献部門を置いた。
実績としては、以下のとおりである（資料 9-1～9-7）。

【生涯学習部門】

生涯学習部門では、次の方針を掲げ、具体的な活動を展開している。人生 100 年時代において「教育・仕事・老後」という 3 ステージの単線的な人生ではなく、様々な活動を並行して行うなどマルチステージの人生を送るようになる。すべての人が元気に活躍し続けられる社会を実現するためにも、大学において社会人に生涯学習としての公開講座を提供している。また、専門性の高い大学教員の講義を受ける機会の少ない地方や学校にも、アウトリーチ型の講師派遣事業を継続実施することで、SDGs 目標 4「質の高い教育をみんなに」の機会を継続的に提供する。

（全国講師派遣事業）

講師派遣事業は、本学の専任教員および元教員が、大学における知を社会に還元するために、560 以上のテーマを提供し、全国に生涯学習の一環として無料で講義を届けている。また、近年では、研修支援プログラムとして、企業等の研修支援に実費のみの安価な価格で専門性の高い講座の提供も行っている。

また、都内をはじめとする小中高等学校、特別支援学校の中には、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて「オリンピック教育」を取り入れているところが多々ある。そこで、本学の教員が小中高等学校、特別支援学校に出向き、オリンピックをはじめスポーツや異文化理解に関する講義を行い地域連携事業としての「オリンピック教育」を推進している。このオリンピック・パラリンピック学習支援講座は、30 以上のテーマを提供し、無料で実施している。

派遣件数については、生涯学習、研修支援講座の実施件数は、北海道から沖縄まで、年間 100 件程度、オリンピック・パラリンピック学習支援講座は、10 件程度派遣している。講師派遣の受講者は、2019 年合計で、生涯学習、研修支援プログラム 4,961 名、オリパラ学習支援 1,704 名となっている。

なお、本事業をスタートした 1999 年～2019 年までの講義回数は、21 年間で 2,294 回となっている。

また、2020 年度より、オリンピック・パラリンピック学習支援講座に代わり、SDGs（持続可能な開発目標）達成学習支援プログラムをスタートした。本学の SDGs の取り組みは、以下の通りである。

創立者・井上円了は、学問は自己満足に終わるものであってはならない、その成果を応用し社会に役立てるものでなければならない、と指摘している。本学のあらゆる教育・研究活動は、すべて世のため、人のため、社会のために行われていくべきである。今日、深刻な社会の課題は地球規模においてつながっており、本学の教育・研究活動はその地球社会を覆う諸問題の解決に向けてなされるべきである。現在、それらの課題を網羅したものとしては、国連で推進している「持続可能な開発目標」、SDGs がある。この SDGs の根本理念は、「誰一人取り残されないように」（No one will be left behind）にある。総合大学である本学は、知の拠点としてこの SDGs に積極的に取り組むことを通じて、地球の未来に大きく貢献する大学となることを目指す。すなわち、Globalization が進んだこの現代社会において、真の Human value の実現を果たすべく、Creativity を発揮して、SDGs の観点から Innovation を現代社会に巻き起こす大学を実現する。

これらを理念として掲げ、小中高等学校、特別支援学校に出向き学習支援プログラムを展開している。

東洋大学講師派遣事業件数一覧(平成22年度～2019年度)

| 年度 地域 | 平成22年度 | | | 平成23年度 | | | 平成24年度 | | | 平成25年度 | | | 平成26年度 | | | 平成27年度 | | | 平成28年度 | | | |
|----------|--------|----|----|--------|----|-----|--------|----|----|--------|----|----|--------|----|----|--------|-----|-----|--------|------|-----|-----|
| | 高校 | 一般 | 計 | 高校 | 一般 | 計 | 高校 | 一般 | 計 | 高校 | 一般 | 計 | - | 生涯 | 計 | 企業 | 生涯 | 計 | 企業 | オリバラ | 生涯 | 計 |
| 北海道 | 0 | 2 | 2 | 0 | 5 | 5 | 0 | 5 | 5 | 0 | 6 | 6 | - | 7 | 7 | 0 | 7 | 7 | 0 | 0 | 5 | 5 |
| 東北 | 3 | 5 | 8 | 1 | 7 | 8 | 0 | 5 | 5 | 0 | 7 | 7 | - | 11 | 11 | 0 | 14 | 14 | 0 | 0 | 16 | 16 |
| 関東 | 10 | 39 | 49 | 17 | 37 | 54 | 5 | 45 | 50 | 3 | 42 | 45 | - | 49 | 49 | 6 | 53 | 59 | 0 | 9 | 61 | 70 |
| 甲信越/中部 | 1 | 7 | 8 | 1 | 10 | 11 | 0 | 9 | 9 | 1 | 4 | 5 | - | 11 | 11 | 0 | 4 | 4 | 0 | 0 | 12 | 12 |
| 北陸 | 0 | 2 | 2 | 2 | 4 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | - | 6 | 6 | 0 | 8 | 8 | 0 | 0 | 5 | 5 |
| 近畿 | 1 | 6 | 7 | 0 | 8 | 8 | 0 | 9 | 9 | 0 | 4 | 4 | - | 7 | 7 | 0 | 5 | 5 | 0 | 0 | 9 | 9 |
| 中国 | 0 | 4 | 4 | 0 | 1 | 1 | 0 | 2 | 2 | 0 | 7 | 7 | - | 4 | 4 | 0 | 5 | 5 | 0 | 0 | 5 | 5 |
| 四国 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 2 | 2 | 0 | 1 | 1 | - | 1 | 1 | 0 | 3 | 3 | 0 | 0 | 3 | 3 |
| 九州・沖縄 | 0 | 4 | 4 | 0 | 6 | 6 | 0 | 8 | 8 | 0 | 7 | 7 | - | 3 | 3 | 0 | 6 | 6 | 0 | 0 | 5 | 5 |
| 合計 | 15 | 70 | 85 | 21 | 79 | 100 | 5 | 85 | 90 | 4 | 79 | 83 | - | 99 | 99 | 6 | 105 | 111 | 0 | 9 | 121 | 130 |

*平成26年度より一般(社会人)と高校を一本化し、「生涯学習」支援プログラムとして実施
 *平成27年度より新規に「企業研修」支援プログラムを開始
 *平成28年度より新規に「オリンピック・パラリンピック教育」支援プログラムを開始

| 年度 地域 | 平成29年度 | | | | 平成30年度 | | | | 2019年度 | | | | 合計 | | | | |
|----------|--------|------|-----|-----|--------|------|-----|-----|--------|------|----|----|----|----------|----------|------------|------|
| | 企業 | オリバラ | 生涯 | 計 | 研修 | オリバラ | 生涯 | 計 | 研修 | オリバラ | 生涯 | 計 | 高校 | 企業 研修 | オリバ ラ | 一般 (生涯) | 計 |
| 北海道 | 0 | 0 | 9 | 9 | 0 | 0 | 10 | 10 | 0 | 0 | 5 | 5 | 0 | 0 | 0 | 61 | 61 |
| 東北 | 0 | 0 | 14 | 14 | 2 | 0 | 11 | 13 | 0 | 0 | 10 | 10 | 4 | 2 | 0 | 100 | 106 |
| 関東 | 5 | 8 | 60 | 73 | 6 | 7 | 50 | 63 | 2 | 10 | 41 | 53 | 35 | 19 | 34 | 477 | 565 |
| 甲信越/中部 | 1 | 2 | 12 | 15 | 0 | 1 | 10 | 11 | 0 | 1 | 8 | 9 | 3 | 1 | 4 | 87 | 95 |
| 北陸 | 0 | 0 | 6 | 6 | 1 | 0 | 7 | 8 | 0 | 0 | 1 | 1 | 2 | 1 | 0 | 40 | 43 |
| 近畿 | 2 | 0 | 9 | 11 | 0 | 0 | 9 | 9 | 0 | 0 | 6 | 6 | 1 | 2 | 0 | 72 | 75 |
| 中国 | 0 | 0 | 7 | 7 | 0 | 0 | 4 | 4 | 0 | 0 | 4 | 4 | 0 | 0 | 0 | 43 | 43 |
| 四国 | 0 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 3 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 17 | 17 |
| 九州・沖縄 | 0 | 0 | 12 | 12 | 0 | 0 | 6 | 6 | 0 | 0 | 7 | 7 | 0 | 0 | 0 | 64 | 64 |
| 合計 | 8 | 10 | 131 | 149 | 9 | 8 | 110 | 127 | 2 | 11 | 82 | 95 | 45 | 25 | 38 | 961 | 1069 |

(公開講座)

春期、秋期の2期に分け、多様なテーマを設け、生涯学習の支援を行っている。講座は、有料のエクステンション講座、無料のオープン講座、地域連携を伴う連携講座、文化伝統を伝える文化公演に分けられる。

2019年度は、創立者没後100周年を記念し、井上円了の生涯を多くの方に知っていただくための特別講座を複数開講した。有料のエクステンション講座については、継続的な講座に加え、新たな受講者層の取り込みのための講座(2019年「論語から社会人力を考える」、「これからの時代のキャリア・デザイン」、「ビジネスリーダーを目指す女性のための最新・観光学講座」、「復興を生きるー東日本大震災から8年、宮城県気仙沼の人びとの挑戦」)も実施している。また、例年申し込みの多い無料で行っているオープン講座については、社会的に関心の高いテーマを設定し、4つのキャンパスで実施をしている。また、白山キャンパスにおいては、文化公演を実施し、芸術にふれる機会を提供している。川越キャンパスにおいては、小学生のためにサマースクールを開講している。夏休みの宿題サポートの役割も担っており、2019年度6コースで246名が受講した。公開講座の申し込み者数は各期合計で、2019年度春講座約1,500名、秋講座約1,260名となっている。

(資格取得講座)

資格取得講座は、社会人にとっての学び直しによるキャリアアップまたは再雇用、学生にとっては就職活動支援を目的に開講している。学内で実施することにより、安価で講座を提供することが可能となる。

資格講座の申し込み者数は各期合計で、2019年度春期4講座111名、秋期3講座56名となっている。

[社会貢献部門]

社会貢献部門は、前述のボランティア支援室による様々な活動支援が、社会貢献に直接還元しているともいえ

るが、これらについては割愛し、それ以外の活動のみ記載する。

（社会貢献情報収集）

本学は、キャンパスが5つに分かれており、それぞれのキャンパスでの社会貢献活動として、独自に地域との関連性の中で、活動を行っている事例が少なくない。また、研究所の研究プロジェクト等による社会貢献活動や、教員個人による社会貢献活動が多く行われていることから、年に1回これらの情報を社会貢献センターが収集し、本学の社会貢献活動としてまとめ、報告している。そこからいくつかの活動をピックアップし、社会貢献センターHPに掲載をしている。なお、社会貢献活動の情報収集の総数は、例年300程度となっている。詳細は『2018年度版 東洋大学社会貢献センター年報』のとおりである。

（地域活性化活動支援事業）

本事業は、過疎化や高齢化をはじめとして様々な課題を抱えている地域に若い人材が入り、住民とともに地域課題解決や地域おこし活動を実施することで、都会の若者に地域への理解を促し、その地域で活躍する人材として育成するとともに、地域住民の人材育成も目的とする。

社会貢献センターでは、学生と教員が共同して進める地域活性化活動を経済的に支援し、今後自立した活動へと発展させていくための支援を行う。2019年度は19企画が採択となった（1企画、先方都合により中止）。地方の活動においては、現地までの交通費等、個人の経費負担が大きく、その時点で学生が活動に参加するハードルがかなり高くなる。助成金を大学が出すことで、地方における地域活性化活動への参加が容易になった。本事業は、教員がかかわることで、地域の問題を的確に分析し適切な指導の下、学生が活動をするのが可能となる。また、ゼミを中心に活動が行われることから、活動を継続的に行うことが出来る。2019年度の活動一覧は、『2019年度 東洋大学社会貢献センター年報（詳細版）』のとおりである。

（2）社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

社会貢献センターが行っている社会貢献活動の点検・評価は、ボランティア支援室においては、2017年度より毎年外部評価を受審している。2019年度より社会貢献センター、ボランティア支援室のそれぞれが外部評価を受審し、客観的な評価を受け、適切な改善・向上につなげる。しかし、2019年度においては新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴い、書面での実施とした。担当者が、評価者に事前説明を行い、書面にて外部評価を受審した。受審後、指摘事項を基に改善・向上につなげる（資料9-2）。

部門ごとの各事業についての点検・評価および改善・向上に向けた取り組みは、以下の通り

【生涯学習部門】

1. 講師派遣事業においては、派遣教員、派遣先からの報告書および受講者アンケートを実施している。派遣教員、派遣先からは、それぞれの実施にあたっての感想、問題点の指摘、受講者からは、満足度についての結果について集計をしている。報告書、アンケート結果などに基つき、派遣についてミスマッチなどが起こらないように、これらの意見結果を十分考慮し、次年度以降の派遣の際の注意点としている。

2. 公開講座については、全講座、受講者アンケート実施している。この結果を教員にフィードバックすることで、次回以降、講座の質を更に高めてもらっている。また、受講者申し込み人数に応じて、講座のニーズを探り、社会から要請の高い講座を開講するよう努めている。しかし、公開講座については、現状のままでは、受講者集めが難しい状況もあることから、コミュニティの場としての役割が担えるような新たなフレームの検討をスタートする。

【社会貢献部門】

社会貢献部門の「地域活性化活動支援事業」に関しては、教員から活動の成果概要として、事業応募時に確認した、①本学における社会貢献活動のさらなる発展に寄与する取組であるか、②そのために学生参画は不可欠であるか、③参画学生に交通費等の経費を支出する場合、そのことにより社会貢献活動上、期待できる具体的な効果、の3点について、活動後に報告書への具体的な記載を義務付けている。しかし、活動実施先からは特に意見をもらっていない。過疎化が進んでいる地方においては、若者が各活動に入るだけで活気が出て、友好的な関係が保たれていると考えられるので、指摘事項が出てくることは考えにくい。また、2018年度より地域活性化活動支援事業の活動報告会を実施しているが、その場で評価することは難しいことから、2019年度の活動より、社会貢献センター運営委員に各活動について評価をいただき、各教員にフィードバックする仕組みを導入した。

また、学生団体の助成金による活動についても同様に活動報告の際に評価をお願いした（新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴い、報告会は中止とし、書面にて実施報告。報告書確認後、社会貢献センター運営委員によるコメントをフィードバック）。

また、2019年度より社会貢献センターの活動においても外部評価を実施した。2020年3月3日（火）東海大学健康学部健康マネジメント学科 市川 享子 講師に社会貢献センター事業およびボランティア支援室の外部評価を実施（新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴い、書面受審に変更）。

第1回外部評価：2020年3月 外部評価者 東海大学講師 市川 享子氏

I 判定（S～C）：A

| | |
|---|--|
| S | 社会貢献センターの理念、目的、全学的な方針に基づいた活動が行われ、目的・目標の達成が極めて高いことが、根拠資料で証明されている。 |
| A | おおむね、社会貢献センターの理念、目的、全学的な方針に基づいた活動が行われ、目的・目標がほぼ達成されている。 |
| B | 社会貢献センターの理念、目的、全学的な方針に基づいた活動や目的・目標の達成がやや不十分であり、改善すべき点がある。 |
| C | 社会貢献センターの理念、目的、全学的な方針に基づいた活動や目的・目標の達成が不十分であり、改善すべき点が多く、抜本的な改善が求められる。 |

II 総評

貴学は井上円了を創設者とし、「余資なく、優暇なき者」のために「社会教育」と「開かれた大学」を目指して生涯活動していた。創設者の志「大学の教育を広く民衆に届ける」が大学教職員や社会に広く浸透し、社会貢献センターがその中心的な推進役を果たしている。創設者の全国巡講の実践を引き継ぎ、センターと教職員により公開講座、講師派遣とも、大変活発に展開されている。特にセンターの特色の一つである生涯学習部門の総講座数が554に達しており、他大学の類似の機関の現状と比較しても特筆すべき状況であり、東洋大学がこれまで培ってきた社会貢献活動の歴史と実績の証左である。哲学系の講座開催が多いことから、建学の精神にのっとった、高い社会貢献を果たしているといえる。社会貢献部門のボランティア支援室は設立から3年という短い期間のなかで、目覚ましい成長がある。今後のさらなる発展が期待される。ボランティア支援室が推進する活動のテーマの広さと学生の安定的な参加は総合大学としての強みとして発揮されており、さらにガイダンスや講座、研修、宿泊型のプログラムなど、段階に応じた支援がきめ細やかに整えられている。今後はこうした幅広いテーマやプログラムを維持しつつ、東洋大学らしいテーマを社会とともに作り上げていくことで、よりボランティア支援室の存在が広く学生等の学内関係者と社会に浸透していくと思われる。また地域活性化活動支援事業は教員と学生がともに取り組むものであるが、教員の指導のもとに、積極的な地域参画・貢献が進められていることも評価できる。

Ⅲ 概評及び提言

1 理念・目的

<概評>

① 社会貢献センターの理念・目的を適切に設定しているか。

社会貢献を大学の第3の使命と位置づけ、社会に開かれた大学を体現する中心的機関として、大学側の積極的な支援を基盤に多方面に活動を広げていることはセンターの強みであり、高く評価できる。学生の社会参画を進めるために社会貢献センター内にボランティア支援室を設立し、多数の学生が活動していることから、社会貢献という使命が実現・発揮されているといえる。一方で大学の使命となる教育と研究がセンターの進める公開講座や出張事業、ボランティア支援の活動と関連づけが明示されていないことから、今後はサービス・ラーニングのような社会貢献と教育と統合した「教育プログラム／カリキュラムの開発」やアメリカの大学で進められてる研究と社会貢献を有機的に結び付けた Engaged Scholarship のように、相互の関係づけを進めることも期待したい。

② 社会貢献センターの目的を明示し、社会と共有しているか

大学の知と学生の力を社会に生かす仕組みとして継続的に公開講座や講師派遣で高い実績を上げ、ボランティア支援室が短期間の間に大きな成果を上げていることは特筆できる。今後はこれらの取り組みを継続発展させるとともに、大学の中期計画にも挙げられているように、SDGs のようなグローバル社会との関わり、人生100年時代の進展による新しいニーズへの対応など、時代の変化に応じた事業を進めることで貴学の強みがより鮮明になると考えられる。

③ 社会貢献センターの目的等を実現していくため、大学として将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策を設定しているか。

「TOYO グランドデザイン」として社会貢献・社会連携部門の中期計画が立てられている。そこで掲げられているテーマは現代社会における最重要な課題であり、その実現が社会からも高く期待されていると思われるとともに、浸透は教育的観点においても重要な影響をもたらすことが予想される。さらに、中期計画で示されている「活動のなかで奮闘する」は貴学独自の理念や特徴であり、その体現がより貴学の価値を高めるものと思われる。計画の実施にあたっては社会貢献センターが中心になるだけでなく、複数の拠点やキーパーソン（各キャンパスや各部門で中心となる教職員や学生、地域関係者）を発掘し、目指す方向性を相互に確認・構築しながら、リソースも共有しながら展開することも効果的と思われる。

<提言>

長所

創設者の建学の精神に基づき、貴学独自の特徴を有する社会貢献センターを発足され、着実に発展させていることは大変貴重であり、大きな長所である。現在社会貢献センターで進めている中心的事業はどれも教職員や学生の活発な参加が進み、それを支援する仕組みが整っている。建学の精神にのっとった形で時代の変化やニーズに応じて、創意工夫に基づいて各機能・事業を充実させていることは特筆に値する。

改善課題

- ・社会貢献センターによる講座においてより双方向性を持たせること、在宅や海外に居住しても学習できる機会を広げるようなオンライン配信等のICTを活用した生涯教育の充実等、貴学の教育のさらなる浸透をはかるための支援について、時代に応じたさらなる工夫の可能性も考えられる。加えて、日本語や英語で学習できる外

国人学生向けの講座（オンライン講座）が一部導入されることで、将来の学部生や大学院生などの留学生の獲得につながる可能性もあるのではないか。

- ・ボランティア支援を受ける学生がキャンパスによって偏りがあるため、その差を縮小するための手立てが必要である。各キャンパスの潜在的な力を生かすため、キャンパス近隣地域の人や機関との連携を含めて、予算や人の配置の仕方等の構造的な部分での検討の可能性もある。

外部評価コメントをまとめると、井上円了を創立者とし、「余資なく、優暇なき者」のために「社会教育」と「開かれた大学」を目指して生涯活動していた。創立者の志「大学の教育を広く民衆に届ける」が大学教職員や社会に広く浸透し、社会貢献センターがその中心的な推進役を果たしている。建学の精神に則った形で時代の変化やニーズに応じて、創意工夫に基づいて各機能・事業を充実させていることは、特筆に値すると評価されている。改善課題については、講座においてオンライン配信についても検討の必要性が求められている。2020年度においては、コロナ禍で対面実施ができない公開講座、講師派遣事業をオンライン化し、配信する予定である。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

【生涯学習部門】

- ① 講師派遣事業については、無料で全国に講師を派遣し、生涯学習支援を行っている。これは、建学の精神を活かした他大学にはない取り組みであり、派遣団体等からの評価も高いことから、継続して実施する。
- ② 公開講座については、どの講座も受講者からのアンケート結果によると満足度の高いものとなっている。実施にあたっては、それぞれのキャンパス実施に加え、白山キャンパスだけでは扱えない分野については、他キャンパスからの教員にも協力を得て、オール東洋での知の還元を実施している。また、多くの無料講座も継続的に実施することで、誰でもが生涯学習を続けられる仕組みを提供し続ける。

【社会貢献部門】

学生による多くのボランティア活動、教員と学生の共同による地域活性化活動支援事業の実施は、本学の社会貢献活動の中心を担っている。また、これらの活動を安定的に実施するために大学予算や課外活動育成会費、寄付金により支援を続ける必要がある。東日本大震災、各地で毎年のように起こる災害の緊急的な支援活動から、フェーズが変わった地域振興に至るまで、途切れることのない活動の支援が現在でも続いていることは、本学の社会貢献の強みである。

【問題点・課題】

【生涯学習部門】

- ① 講師派遣事業については、社会貢献活動として実施しているが、自治体等の生涯学習支援の肩代わりとして活用されてしまっている部分もある。
- ② 公開講座については、新たな受講者層の掘り起こしが難しく、白山においては文京区という土地柄、大学が隣接しており、どの大学でも同様の取り組みを行っていることにより、差別化が難しく、受講者の獲得に苦慮する状況である。
- ③ 2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、公開講座について春期は全講座中止となり、秋期についても感染拡大が収まっていない状況下で、対面の実施が可能かどうか微妙な状況である。このような状況でも、生涯学習の機会を提供するためにオンラインの導入を検討しているが、オンラインに対応できない高齢者については、今年度は受講を見送ってもらう可能性が高い。また、講師派遣事業についても同様で、都道府県をまたぐ派遣が多く自治体、大学の行動指針により実施できない可能性がある。これについてもオンラインの可能性を検討しているが、自治体によっては設備が整っていない場合は、中止となる。人生100年時代の生涯学習を進めることは、コロナ禍においては、非常に難しい状況である。

【社会貢献部門】

地域活性化活動支援事業の活動自体は良いものではあるが、活動を続ける上では、ひとりよがりの活動ではなく、問題点を見つけ改善を図る必要がある。また、これら多くの活動を全体として今後、何に結び付けることで、社会貢献活動が充実するのかを検討する必要がある。また、学生が中心のボランティア活動についても災害直後の安全性も含め、専門家のアドバイスなどを聞きながら、実施内容等を精査することが必要。

2020年度は、社会貢献活動についても、すべてストップしている。ほとんどすべての活動が、現地での活動のため、移動制限があるコロナ禍においては、実施ができずオンラインへの切り替えが難しいことから、中止になる可能性が高い。

【将来に向けた発展方策】

【生涯学習部門】

前述したが、公開講座については、現状のままでは、受講者集めが難しい状況もあることから、コミュニティの場としての役割が担えるような新たなフレームの検討をスタートする。資格取得の部分については、社会人に有用なシステムを構築する。人生100年時代において「教育・仕事・老後」という3ステージの単線的な人生ではなく、様々な活動を並行して行うなどマルチステージの人生を送れるような支援を続ける。

また、コロナ禍で対面実施ができない公開講座、講師派遣事業についてはオンライン化し、配信する予定している。

【社会貢献部門】

次年度の東京2021大会、自然災害が毎年多発していることから、大学としてのボランティアマインドの育成と活動の充実、また、国連の定めたSDGs目標達成のための大学としての使命を含め、本学の社会貢献の発展に寄与し、もって社会に開かれた大学としての発展に資することを目的に活動を展開する。

現状では、将来に向けた発展方策の実施は困難な状態である。

【根拠資料】

- 資料 9-1 2018 年度版 東洋大学社会貢献センター年報
- 資料 9-2 2019 年度版 東洋大学社会貢献センター年報
- 資料 9-3 2019 年度 東洋大学公開講座のご案内（春期）パンフレット
- 資料 9-4 2019 年度 東洋大学公開講座のご案内（秋期）パンフレット
- 資料 9-5 2020 年度 講師派遣 生涯学習支援プログラム/研修支援 プログラム①、②
- 資料 9-6 2019 年度 講師派遣 オリンピック・パラリンピック学習支援講座 プログラム
- 資料 9-7 2020 年度 講師派遣 SDGs（持続可能な開発目標）達成学習支援プログラム